

飯沼文集

四十一

夕日岡月次集

~ 4

4447













女百園月次集

早春野

森久萬雄

君の心あはれを春つとんとおぼしめしおとどけの白妙の香のまじり

此の心を春つとんとおぼしめしおとどけの白妙の香のまじり

すくなくもて奇麗な心よあらはれしめておとどけの

心を春つとんとおぼしめしおとどけの白妙の香のまじり

岩崎長世

田舎の心よ春つとんとおぼしめしおとどけの白妙の香のまじり

青木雅宣

日く春つとんとおぼしめしおとどけの白妙の香のまじり



倉田績

自得在 一 廣

きんこのころをえあのみくをたつ下をくすん地をのり  
昔のなみりまひまて姉の嫁あけわ休めぬを春のあつた  
十一年の文治元年よりしては神の社の東なる地  
つふさるあまの地をかくよめをちん

曙鶯

白山直福

山の嶺を縁のあつたをくすん地をのり

辰村常廣

海をみだるおのりの中村をのり

幸字

子彦

さかちのくすん地をのり

水邊若菜

真川本典

里のくすん地をのり

春雪

寶藏院實雄

さかちのくすん地をのり

野外殘雪

櫻伊勢力雄

おのりくすん地をのり

毎山有春

山中義信











あな

昔も昔もあなをしのびてゐるわがこゝろの秋あつし

待遊

あな

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

はなをいそぐ花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊

さくらさくら月夜に花の香をいそぐ、秋あつし

待遊







そりのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

吉屋菅賢

神まつるまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

日 あや子

ちんちんまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

千彦

色りまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

牡丹

久保田有恒

とくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

雅定

階のまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

たのあまの押ひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

光子

あまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

貞夫

まのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

千彦

花のまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

溪邨花

繩

まのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て

生田茂時鳥

みね

あまのくちぢひくひの枝を新なる張代にんこくを以て



新宮

布曳の湯がうらやまをよむ生田のうらやまの湯

千廣

あまの湯がうらやまをよむあまの湯

うらやま

あや子

かろめりの湯がうらやまをよむあまの湯

小竹亀磨

わむすみの湯がうらやまをよむあまの湯

古石

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯

土蔵

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯

うらやま

あはれ

湯の湯の湯がうらやまをよむあまの湯

川瀬廣磨

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯

貞夫

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯

長真

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯

あや子

うらやまの湯がうらやまをよむあまの湯



























山室の形ぬらう押らう此の申ある松のあらうや好のうらん

小廣

ちきいぬと月みる有威る酒あはるあきの夜うらつて重  
香あおみ振くすうさうたはるあおみあはるあきの夜

更附

白旗のあらうや山も秋さきく夜うらうらうあはるあきの夜

糖宣

社歌月

しんまのあはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜  
あはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

あ廣

あみねのあらうや山も秋さきく夜うらうらうあはるあきの夜

伊部雄

系后月

あはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

玉泉院實裕

嵩月

申すのあらうや山も秋さきく夜うらうらうあはるあきの夜

美穂

うらうらうあはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

浅尾胤雄

淀川秋月

うらうらうあはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

同 政昭

うらうらうあはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

政子

うらうらうあはるあきの夜うらうらうあはるあきの夜

し















あんなにまのあはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

幸月

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

若菜

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

千夜

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

吹田宗知

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

常陸

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

春峰

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

本典

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

常廣

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

幸月

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

若菜

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる

あはれにほめたまはるるはなほあはれにほめたまはるる



















この世のついでに...  
千廣

あつむの...  
千廣

寄鏡恋

ねまね

あつむの...  
あや子

あや子

山鳥の...  
春餅

春餅

あつむの...  
春餅

春餅

あつむの...  
本曲

本曲

あつむの...  
千廣

千廣

あつむの...  
千廣

千廣

あつむの...  
千廣

千廣

あつむの...  
千廣

千廣

山鳥の

千廣



夕のま又暮るわあ平そつとくゆる池のふたや掃く可きん

長世

花のあもお葉の枝もまらぬ煙をねね一ゆきのすまのま

長世

あきぢらぬゆい子ねてや屋電の煙を世のたつこえりり

あつとみおのふ松すゑ電の煙をちりひく色もまをんえ

あや子

春のんて年のちのるよ成残さうとくのゆきのあきの屋電

あは子

雪のあつとまのあ屋電をてらよ世世火のあおと清くむ

任吉お風

長世

法師のたふくのせえあのふあひあつる。千舟のたひて成え

宮後

すみのえんやあつとまのあ屋電をてらよ世世火のあおと清くむ

物宮

伝のほや神の馬あまのり。此の蛇のあゆめたまはあふえ

本典

すみのえんやあつとまのあ屋電をてらよ世世火のあおと清くむ

素直

すみのえんやあつとまのあ屋電をてらよ世世火のあおと清くむ

茶葉

時傳のあつとまのあ屋電をてらよ世世火のあおと清くむ



系明

おのゝこし遠祖神代の沖つつをよまのわらわらぬ

八木宮棟

甲方の海舟結しつるは流成字あまのこころの

有姫

伝きと神も定めて言をきこむ無事のりねね

常盤

すまのの松小志くまの川のわらわら八百代

春日

流のねのきくまのきくまのわらわら

常盤

すまのえやまのあまの春秋もわらわら

春日

伝のの流ねのくまのわらわら

春日

沖つ原をきくまのきくまのわらわら

伊勢

すまのえやまのあまの神さきくまのわらわら

春日

すまのえやまのあまの神さきくまのわらわら

春日

よる原の白ゆきのそよよのわらわら



墨江や美代よみ松原を以て新梅よみしとらん  
作の如やふし新る美代字抄の如きも本所より

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '千巻'.*

並松蔭のそぬこのまじしに難波の  
うつらきまゐりてしなまのいむのく  
野さうさつあくるまよこのく新信をまよ  
ものうら水門よきまゐるに越つてしなま  
まじくして千船をんよむくるとま  
うら難波夕よまゐるまなんまゐるま  
あまをゆくよう水交とあまのえ随縁集  
といふまゐるに巻美次をまゐるまゐる難波巻  
まゐるまゐるまゐる文集をまゐるまゐる







牟久園の主人の書

安永二年雅堂の書

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

明治四辛未年四月

牟久園



大阪心舟橋通北久太郎町北八

賣弘書肆

柳原喜兵衛



